む遠視的近視眼者……純潔純粹……將來の世界指導者……永遠の種

我國民道德は大和魂（大和心とも云ふ）に發するものである。此大和魂といふことは隨分古くから稱へられた言葉であるにも拘らず、其由來や性質を明にせず、唯單に尙武の心位に止まるやうに解して居る人々も少なくない。即ち茲に少しく大和魂に就て說明を試み、我國民道德の此に發する所以を明にするの必要を認めるのである。

魂とは靈である。靈は精神で心の源である。靈の純粹なる所に氣あり力あつて、其氣力の併發するのを魂の發現といふ。大和魂とは靈の精にして心の華、即ち靈の精華である

『やまと』とは大和の二字に相當する語で、其字義の如く大に和することをいふ。即ち大は無限にして絕對の意、和は慈しみであつて愛の義である。故に大和とは愛の無限にして和の絕對なることを意味するのであつて、大海の洋々たる如く愛の滿々として和氣の溢れんとするもの之れ即ち大和魂である。併し大の絕對を意味する內には、儼乎として易ふべからず、確乎として拔くべからず、凜乎として犯すべからざるものゝ存するは言ふまでもない事である。即ち此大和魂から我國道德は流れ出たものである。本居宣長の

敷島の大和心を人問はば
朝日にほふ山櫻花

と詠んだのは、日本人の本性が天眞爛熳、美しく、潔く、明かに淡白に、執着なく、恰も朝日の前に咲き匂ふ山櫻の花のやうにパッとして實に表裏のない、透通るやうな潔い氣質、即ち清廉潔白忠勇義烈、高雅優美の質を具へて居る事を云ひ表はしたのである。又或神道家は『大は廣くして容る者、和は平にして安なる者、故に廣く平にして安く容るゝ者は大和魂である。大は圓くして滿てる者、和は靜にして謐かなる者、故に圓く靜にして謐み滿つる者は大和魂である。大は闊にして包む者、和は泰かにして完き者、故に泰然として闊く完全に包む者は大和魂である。大は嚴にして寛なる者、和は親しみて睦ましき者、故に嚴にして親しく寛にして睦ましき者は大和魂であ

る。大は長くして多き者、和は切みて嚀なる者、故に長く大切にして多く叮嚀なる者は大和魂である。大は重くして量る者、和は仁にして義なる者、故に仁を重んじ義を量るは大和魂である。大は精にして偉なる者、和は禮にして智なる者、故に禮に精しく、智の偉なる者は大和魂である。大は優しく勝つ者、和は正しくて信なる者、故に正ふして優しく信にして勝つ者は大和魂である。大は衆にして雜る者、和は密にして合ふ者、故に衆に合ふて密に雜はる者は大和魂である。斯樣に大和魂は雄大深妙であつて其範圍の廣汎なる、到底測り知る可からざる底のものである』と說いて居る。

彼の藤田東湖の正氣歌の如き、また大和魂を詠んだに他な

らぬのである。左に掲げやう。

天地正大氣　粹然鐘神洲
巍々聳千秋　注爲大瀛水
發爲萬朶櫻　衆芳難與儔
銳利可斷鋏　蓋臣皆熊羆
神洲孰君臨　萬古仰天皇
明德侔大陽　不世無汚隆
乃參大連議　侃々排瞿曇
餙々焚伽藍　中郎嘗用之
清丸嘗用之　妖僧肝膽寒
虜使頭足分　忽起西海颶

秀爲不二嶽　洋々環八洲
凝爲百錬鐵　武夫盡好仇
皇風洽六合　正氣時放光
乃助明主斷　宗社盤石安
忽揮龍口劒　怒濤殲胡氛

志賀月明夜　陽爲鳳輦巡
又代帝子屯　或投鎌倉窟
或伴櫻井驛　遺訓何慇懃
一身當萬軍　或殉天目山
昇平二百歳　斯氣常獲伸
生四十七人　乃知人雖亡
長在天地間　凜然叙彝倫
卓立東海濱　忠誠尊皇室
修文興奮武　誓欲清胡塵
邦君身先淪　頑鈍不知機
孤臣困葛藟　君冤向誰陳

芳野戰酣日　憂憤正悁々
或守伏見城　幽囚不忘君
然當其鬱屈　英靈未嘗泯
敦能扶持之　孝敬事天人
一朝天步艱　罪令及孤臣
孤子遠憤墓

何以報先親　衽茵一週星　獨有斯氣隨
嗟予雖萬死　豈忍與汝離　屈伸付天地
生死又何疑　生當雪君寃　復見張四維
死爲忠義鬼　極天護皇基

之れ實に大和魂の絶秀絶美なる特質を形容したものである。畏い事ではあるが、明治天皇の降し給へる敎育勅語も、此大和魂の由來と性質とを明にし給ふたものと拜察せられる。で大和魂はあらゆる美德を包括したものであるが、此美德を部分的に見ると愛などのやうに外國にあるものも少なくない。併し忠孝、義勇、潔白、果斷等は大和魂の有つて居る特質と云つて差支ないもので、外國に比し著しく秀でゝ居ることは學者の認めて居る所であつて、我國ほど忠孝の念の發達した國は、世界の倫理史を繙いて見ても何處にもないとのことである。そこで此忠孝義勇等の特質は、語を換へて見ると、己を捨てゝ人の爲めに盡す、即ち己の爲め私利の爲めといふことを顧みずに道の爲めなら己れを捨てゝも盡す、不義なことは少しでも嫌だ正しい事なら飽くまでもするといふ事になる。で此己を捨てゝ正義の爲めに盡すの念を犧牲的精神と云ふのである。

犧牲的精神は例へて見ればランプの内の石油の如き者である。ランプが煌々たる光を放つ間に石油は消滅する。即ち石油は自ら消滅して光を放ち暗夜を照すのである。で此犧牲的精神は場合と目的とによつてそれ〳〵現はれ方が違ふ。或は

親の爲め、或は家の爲めに一身を犧牲に供する者もあり、或は宗吾の如く四邊の人の困苦を救はん爲めの犧牲もあり、或は戰役に臨んで君國の爲め一身を捧げるもあり、或は明治維新前後の志士の如く國家皇室の爲めに狂奔し遂に幕吏の毒刃に斃れ又は焦慮の結果自刃した者さへもある。而して此等一點私利や利功の念のない高潔な犧牲的精神が發現する時に、人をして感動せしめる事の絳大なるは云ふまでもない。例へば旱魃の爲め稻が枯れんとする場合に一雨降つたならば、田は忽ち潤つて稻の生氣を回復するが如きである。そこで國家の爲めに犧牲たるを甘んずるものが續出すれば、假令其犧牲が完全に現はれないまでも、其精神の感化の及ぼす所、少なくも國家の爲め微力を盡さうとする者が多くなり、其力の集合する結果として國家は興隆するに至るのであるが、若し之に反して國家の爲めに犧牲たるを肯んぜぬやうな思想のみ世に行はれるやうになれば、其國家は漸く衰頽に傾き遂には滅亡の悲運に會するやうな事にもなるのである。此意に於て我國の如き犧牲的精神の充ちた國民の將來は幸福であるといはなければならぬが、近來一部遠視的近視眼者たる歐米思想崇拜家が、歐米に行はるゝ危險思想をまで我國に輸入して之を傳播せしめんとするの傾向あるは、恐くべく戒しむべき事である。歐洲を始め世界總ての國家中、唯我國を除くの他は皆國家成立の基礎に欠陷があり、從つて危險思想も起るの已むを得ざる事情あるが、我國の如き完全なる

國家に斯くの如き思想を移すの必要が何所にあらう。彼等遠視的近視眼者は、自ら結核菌を飲んで肺結核に罹ると選ぶ所なく、其愚や到底及ぶ可からざるものである。昔は腐儒事を誤ると言はれたが、今の所謂近代思想家なるものゝ中には、此腐儒と等しく口に筆に頗る巧みに事を論ずるけれども、空理空論毫も世を益する事なく却つて多くの人心を誤まらしめつゝある者多きは痛歎すべき限りであつて、遠視的近視眼を癒すべき事今日より急なるはないのである。

語は少しく岐路に入つたからまた大和魂に戻る。大和魂の特質は前に述べたが、此特質は煎じ詰めると、總ての罪惡を含まない、總ての不義を含まない、純潔＝純粋といふことに歸して

了ふ。即ち前に大和魂の靈は純粋なるものと言つた所以である。純粋とは物が混つて居ない、唯一といふ事と、淡白と、清くて濁つて居ないとふことを意味する。即ち單簡、淡白、清淨である。此大和魂の特質たる純潔を重んずる性は非常に尊いもので益〻發達させなければならぬものである。それは何故であるかと云ふに、由來眞理は一にして二あるべからざる最も純一なものであり、人間の踐むべき正道も亦一にして二あらざる最も直なるものであつて、此單純ではあるが最も重大なる事を爲し遂げるには、事物の單純＝純潔を好尚し、崇拜し、且つ愛護する所の國民でなければ、其目的を貫徹し得ないからである。即ち眞理を究め、人間の正しい道を踐むには、大和魂が最も必要

且つ大切だといふ事になるのである。今や列國は互に其文明を誇り、學說や主義や好尙は千差萬別とも云ふべく、種々なる宗教が行はれ、何れが眞理か、正しい道であるか容易に判別すべからざる有樣であるが、此暗中模索の如き狀態に對し、一道の光明を與へるものは最も正直な、最も高潔な、己を空ふして道を思ふ國民の外に求める事は出來ない。即ち此特質を帶びた所の大和魂を有する日本國民が眞の理を發見し、眞の道を發見し、學問上に於ても、人間の道に於ても、日本が將來世界の指導者となるべきことを信じて疑はないのであつて、此點より見て益〻大和魂を尊び、益〻大和魂を發達せしめんことを希望して止まないのである。

此大和魂から發する我國民道德の如何なるものなるかは、また說明を要せずして明らかなる事と信ずる。而して宗吾の言行は、愛と正義に基く犧牲であつて、全く大和魂の發現に他ならぬ。即ち單に現實に領民を救つたに止まらずして、其崇高なる犧牲的精神は、恰も名香の薰じて他人の肺腑に泌み腦髓を衝くが如く、絕大なる感化を人に與へて、永遠に無量なる精神の糧を送りつゝあるのである。

第六章　國粹と基督教

一、神の意義

神は大和魂の本源たる御靈也……天地萬物創造の

神……平田篤胤の古道大意……地神五代……天照大御神の御神德……三種の神器と絶對無限の靈德……古來不言實行の國……皇國人種の祖先……エホバの天地萬物創造……ノアの洪水……ゴッドと神

我日本國民が古來稱へ來れる神なる語は『形なく靈あり、無上自在の通があつて、世に禍福を與へ、人の善惡の行に加護冥罰を下すもの、又往代の皇靈、其他聖賢、英雄、偉人等の死後の魂を祀れるもの及びすべて人智で測り知られざる事』を意味して居るのであるが、著者は更に之を明確に言ひ表はす爲めに『神とは大和魂の本源たる精靈である』と言ひたい。大和魂は前節に述べたる如く、無限の愛と絶對の和とを現はすもので、

高天原に在せる天之御中主神の聖靈より湧き出で、天神七代、地神五代を經て、我國祖天照大御神に至り皇靈となり、最も圓滿に其萬能の力が發現れて活動を始めた。即ち天照大御神は大和魂の本源であらせられる。歷代の天皇は天照大御神の皇靈を繼ぎ給へる所、神と崇め奉るは申すまでもない事である。又國民と雖も神の御心を崇め、至誠を以て道を踐めば其所に大和魂が現はれる。即ち其人の靈は神たる大和魂本源の靈と一致する、神我一體となるから神として祀られる。我日本國民の尊崇する神とは實に斯くの如きを言ふのである。次に少しく天神地神に就て述べやう。

天地の創造に先ち絶對純靈の神が在し、其純靈の一分を天地

萬物の精神に賦與して世界を活かし、又其純靈の餘分を放散して天地造化の靈氣とした。此絶對純靈の神が天御中主神であつて、大和魂は此神から湧き出たのである。次に高皇產靈神、次に神皇產靈神、次に葦牙彥舅神、次に天常立神、次に國常立神、次に豐國主神。以上七神は天地萬物創造の神であるが、精靈のみあつて形體のない神であるから天神とも隱身の神とも稱へる。後顯身の神を天津神と稱へるに對し、此神等を別天津神と稱へる。即ち此七神は全く形體のない精靈であつて、造化の妙を稱贊して名を表はし奉祀するのであるから、其神名が各神德を現はして居るのである。高皇產靈神以下の御名の大略を說明すれば、天御中主神の放散し給ふ靈氣が宇宙に散在するに方ては

反撥發展の作用を有つて居るが、一たび或る形質內に入れば忽ち凝聚喰引の作用を生じて其形質を收斂固結せしめる。此反撥發展の德を尊崇して高皇產靈神と稱し、凝聚喰引の德を尊崇して神皇產靈神と稱へ、發展の作用と喰引の作用と接觸する時物は初めて其間に發生する、其發生の德を尊崇して葦牙彥舅神と稱へ、次に一物が發生すれば忽ち內外の別を生じて精神は其內に寓り、形體は外を包み、神と形を抱合して全體を發達せしめる、此精神の德を尊崇して天常立神と稱へ、其形體の德を尊崇して國常立神と稱へ、次に物が發達すれば精氣を生じて永遠に之を繼續蕃孳せしめる、此精氣の德を尊崇して豐國主神と稱へる。即ち天道の妙造化の秘を極める所の絶大なる靈の力を神名に

表はしたのである。

古神道大家平田篤胤は、萬物悉く皇産靈神の神德によつて出來るものと說いて居る。此說は前に述べた所と矛盾するやうであるが、決して矛盾はしない。即ち天御中主神の放散せる靈氣が發展嚆引の作用によつて物を生ずる。此發展嚆引の神德を有する皇產靈神を以て萬物創造の神と稱へても矛盾はない。此篤胤の說は啻に神名の說明に止まらず、我天神を以て世界萬邦に照臨する神とした所に、今日の遠視的近視眼者等の及びもつかぬ識見を認めることが出來るから、其著古道大意の中から左に抄錄する。

天御中主神より以下、伊邪那岐、伊邪那美神まで、十七神の御名

に悉く深い譯がある。此をよく心得ると、別して其神々の妙なる道理も能く分ることでござる。なれども今は只その道をかけて通ることに、是は別に委しく申すつもりでござる。但し是うち皇產靈神の御名の義をば、今が今きつと心得ねばならぬ譯が有に依て、是をば一通り申ませうでござる。其は先づ虛空の中へ、一つの物の出來たるを始め、其中より葦芽の如く萠え上つて天日と成りたるも、神々の御出來なされたも、此伊邪那岐、伊邪那美神の、御國を御生み固めなされて、日月の神を始め奉り、もろ〳〵の神を御生みなされたるも、又此後も追々もろ〳〵の神々が御出來なされ、各々それ〳〵に主宰て在らせられるけれども、其元

は皆この皇産霊神の御德に依てなる事でござる。そりやどうして知れると云ふに、其譯が御名の上に具はつて居る。其はまづ高と云ふも神と云ふも尊んで申したる詞、又皇と申すは御の字の意で、高といひ、神といひ、御と云て、此神の御德を大にほめ稱たものでござる。又産と申すは、産すると云ふ字、また生ずるといふ字の義で、物をむし生じ出來すことでござる。古歌に『我君は千世に八千世にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで』と云ふは、苔の生えるまでと云ふことで、則ちそれと同じ詞でござる。又今の世にも、むすこむすめなど云ふもすなはち我むし生じた子と申すことで神代の古言の遺つて居るのでござる。又むすびのびは、奇

々妙々にして言にいはれず測り知れぬ尊きことを云ふ古言で、まのあたり此世を御照しなされる日輪を、日と云ふも熟々見れば見るまに〳〵、はなはだ靈く尊く、奇々妙々なる物故に、日とは云のでござる。皇産霊神は、天地をさへに、御作り遊ばす程の、奇々妙々なる御神德を具へて、入せらるゝ神様ぢやに依て、びと申詞をそへて、申上げたものでござる。御名詞の義をちゝめて申さば、天と申す高き處におはし座して、世にありと有る事物を、生じ御出かし遊ばす、奇々妙々なる尊き神と申すことでござる。又御名の上で知るばかりでなく、其は追々に分りますが、伊邪那岐、伊邪那美二柱の神へ、天の沼矛と申す、御矛を下されて、此漂へる國を、造り固

めよと仰付られて、御下しなされたを始めとして、世の中の諸事を主宰て在せられる譯が、神代の事實の上で明かに、見えてある。又事實に見えて有るばかりで無く、神武天皇より二十四代に御當りあそばす顯宗天皇の御代の、三年と云ふ春一月のことぢやが、日の神また、月の神樣が、人に思託なされて、阿閉臣事代と云ふ人へ御誨あそばすには、我御祖高皇產靈神は、天地をさへ造りました御功あり、仍て神領の民地をさし上げられよ、若其通り差上られたならば、我幸に守らうと御誨しなされたのでござる。是に因て神領の民地を差上られ、それ〳〵仰付られて、御祭あそばし、又こゝかしこへ、其御社を御建て遊ばしたなどの、慥なることもあるでござる。扨此時の、日の神月の神の御誨言に、高皇產靈神の御神をわが御祖と仰せられましたが、此御祖と申すは、近く申さば、御先祖と申すほどのことでござる。一體日の神月の神は、伊邪那邪神の御子にはおはし座しながら、高皇產靈神を我祖と仰せらるゝはどうした譯ぢやと申すに、諸々の神々の御出來なされた事も、言もて行けば、皆此高皇產靈神、神皇產靈神の、產靈の御靈に依らぬと云ふことはない、其故に日の神、月の神樣でさへ、皇產靈神をば、我祖と仰せられたものでござる。既に神代の卷には、產靈の神樣に御子が千五百座まし〳〵たと云ふことが有る。ちいほと申すは千五百と書いてあるけれども、千五百に限つたことでは無

い、此は只數の限りなく多いことを、古言には千五百とか、八百萬とか云ふ例で、有ゆる神等を、皆此御神の御子ぢやと申しても、實は宜いやうなものでござる。其故は、神も人も皆この御神の產し御生みなさるゝ、奇々妙々なる御神德に因て、出來るからのことでござる。拾遺集と申すは、三代集の一つで、朝廷の御撰集ぢやが、其中に

君見ればむすぶの神ぞうらめしきつれなき人を何つくりけむ

と申す歌がある。此歌の意は、扨々君は情ない方ぢや、さう情なくさつしやる君を見る度ごとに、產靈の神樣が、御恨めしう存じまする。其譯は、なぜ此やうにつれない人を、御造り出しなされたことぢやと、染々思ひまするとと云ふ意で、是もと、戀の歌では有るけれども、此時分までは、此神樣の御德を、世間の人もよく覺えて居たる故、斯やうの歌も詠んだのでござる。なんと皇產靈神と申す御名の譯と云ひ神代の古事を御記しなされたる事實の上に、何事も其本は、皆この二柱の產靈の妙たる御靈に因る所以が、明かに見えたると、月の神日の神の御さとし言に、我祖高皇產靈神は、天地をあひ造らし、御功ありと、慥に御さとしあそばしたることなども、此神の御德の有難いことも、實に天にまし坐て、世の中を主宰して在せらるゝ譯も、よく分ることでござる。さ、是程によく道理の見えてあることでも、唐や天竺の學問を、わる

く仕損つてゐる學者中、又は學問がなくても、生さかしらに生れ付た輩などは、其己が生れて出たるも、直に此御神の產靈の神靈に依て、出來たる物なることを辨へず、猶しつこく疑はしく思つて、そりや此國ざりの昔ばなしで、實にさうだか信じられぬなど思ふものでござる。さやうの族には、まだ〳〵申聞かす事がある、なんと御國ばかりでなく、諸〳〵の外國に、人だねの生たるのも、又惡いながらも國らしくなり、夫〳〵に物の出來たるも、皆此神の御靈に因ることで、其證據には、國其〳〵に各〳〵その傳へがある。夫はまづ唐の古傳說に此神の御事を、上帝とも天帝とも、或は皇天とも名づけ奉つて、其神が天上に坐まして、世を主宰して、人も其御靈の依

て生じ、又人の性に仁義禮智と云ふやうな、誠の心を具へて居るのも、皆この上帝のなされごとじやと云ふ傳が、形の如く傳つてある。是はからの書物でもぐつと、古く、詩經、書經、論語など云ふものを見ても眼を活して見るとよく知れる。但し漢土は、生さかしらな國俗ゆゑ、夫ををかしく寓言のやうに、とき扨げた說どもが有るなれども、其事は先年『鬼神新論』と云ふ書を著はして、具さに辯じて置くことでござる。又天竺の古傳說に、產靈神の御事を、大梵自在天王と稱し、また梵天王とも申傳へて、是もやつぱり其神が忉利天と申す至て高い天上に御坐して、世中を主宰して、尤も天地も人間萬物も、皆此神の造つたもので、此神ほど尊い神はない

と、上古から言ひ傳へたものでござる。所がはるか後世に釋迦といふ人が出で、佛道といふ事を、己が心を以て作りはじめ、神通と云つて、實は幻術ぢやが、其幻術を以て人を惑はし、其梵天王、帝釋天のやうなことでは無く、其を供にもつれる程の、けしからず尊い程の佛と云があると云つて、大それた妄說を弘めたものでござる。所を、昔から博識な僧徒も、いくらか出たなれども、釋迦が妄說に目がくらんで、此譯を云つた者は一人も無いでござる。是らの委い譯は、佛道の演說に申すつもりでござる。又天竺よりも遙西の方にも、幾らともなく國が有つて、其國々にも、夫々に天つ神の、天地を始め人また、萬の物をも、御造りなされたと云ふ傳が各々

有る、是も蘭書と云つて、和蘭陀の書物を見ると、よく知れるでござる。さあ、なんと此通り萬國いひ合せたやうに、天津神の天に御座まして、萬を產なし給ふと云ふ傳が、訛りながらもあるを考へ合せて、皇國の古傳說の、小綠ならぬ譯がしれるでござる。然れば世に神々は、甚も〳〵多く御し坐せども、此御神は、其大本にまし〳〵て、殊さらに尊くおはしまし、其產靈の御德、申すも更なる御事ぢやに依て、有が中にも、仰ぎ奉るべく崇め奉るべきは、此神樣でござる。夫ゆゑに、神武天皇の御代に、天皇命御自ら、鳥見の山中に、祭時を御立あそばして、御祭なされ、又八柱の神々を朝廷の御守神と御祭なされたるが、其第一に、此御產靈神二柱を御祭な

され、次に玉積産日神、つぎに生産日神、つぎに足産日神、其外は、大宮乃賣神、御食津神、事代主神以上八柱なり、則ち神祇官の八神と申し奉るは是でござる。此中でも玉積産日、生産日、足産日の三柱は、伊邪那岐の大神の司命の御靈の神におはしますこと、別に委く考へ置いたでござる。扨かほどまでにも、産靈の御神を重く祭なされ、又右に申す通り、唐、南蠻、クロンボウの國々でさへ、此神の御德をば、第一と崇め奉る事の中に、其神國に生れ、神の御末とある此御國の人の、よく辨へて齋き奉らぬと申すは、あまりと云へば不糺なことで、勿體なしとも勿體なく、畏きことの限りでござる。（以上は平田篤胤の說であるが、寔に道理あることで、西洋では造物主がアダムとエバを造つて、それから人間が繁殖したといふが、我國には我國としての立派な傳說がある以上、我國民としては之を信ずべきが正當である）

次に地上に成りませる神の御名は泥土煑神（男神）沙土煑神（女神）、次に角樹神（男神）活樹神（女神）、次に大處舅神（男神）大處姥神（女神）、次に面足神（男神）惶根神（女神）、次に伊弉諾神（男神）伊弉冉（女神）の十神で、形體ましますが故に地神と稱し、夫婦並びませるが故に二神を合せて一代と稱す。所謂地神五代とは是である。此神々は何れも國土經營の御功績があつたのだが、其世代年數は不明である。そして此伊弉諾、伊弉冉兩神の間に一女神が生れ給ふた。御名を大日孁尊又天照大御神と稱し、また單に日神とも

稱し奉るのである。

天照大御神は我皇室の御祖先であらせられると同時に、實に大和魂の本源であらせらる。前にも述べた如く靈の純粹なる所に氣と力があり、氣力の併發するのを魂の發現といふ。此の魂氣の強く烈しく活動する時は火(太陽)を生ずる。即ち天御中主神の放散せる靈氣が、他の天神の神德の作用によつて天地萬物を生じ太陽も出來た。太陽が高空にあつて光輝を放ち宇宙を照すのを明德と云ひ、陽氣を發して萬物を煦育するのを溫德と云ひ、炎熱を熏じて陰濕を變化するのを烈德と云ふ。宇宙の萬物は悉く此明、溫、烈の三德によつて活きるのである。そして人の形體に於て此三德を發現すべく降誕し給ふたのが

天照大御神であらせられる。即ち前諸神の神德を悉く具へ給ひ、御身躬ら萬能の始源、活動の主たることを示し給ふた、太陽の明溫烈は、大御神に於ては智仁勇となり、此三德を以て我國體を創建し、永遠に精神の泉を與へ給ふたのであつて、無限の愛、絕對の和なる大和魂は茲に源を發して、あらゆる美德となつて現はれるのである。

大御神は此絕對無限の靈德を皇孫瓊々杵尊に傳へ給ふに三種の神器を以てせられた。大御神は少しの隔てもなく萬民に照臨し給ふが故に、萬民の狀態は其儘に大御心に映り來り、萬民の喜ぶ時は大御心も亦喜ばせ給ひ、萬民の悲しむ時は大御心も亦悲しませ給ふこと明鏡の萬物を映すが如く、實に君民一體の

國體の起る所以であつて、太陽の宇宙に照臨する明德と同一體なる大御神の智德であらせられる。故に皇孫寶祚に既かせ給ふ御時に方り豐葦原の瑞穗の國は吾が御子の繼々王とますべき國なり、安國と平らけく安らけく知ろし召せと宣ひ、天津日嗣第一の御璽として御手づから八咫鏡を授け給ひ『此寶鏡は吾が御魂として同殿同牀に坐さしめて吾れを齋くが如く齋き奉り給へ寶祚の隆えまさむこと天壤と無窮なるべし』と宣ひ、君臣一體の御心を不言の中に傳へ給ふた。次に大御神の御仁德を表はすべき八尺勾璁を授け給ふた。之は大御神が千萬世を洞觀し給ひ、天下の禍は爭亂より悲慘なるはなく、爭亂の起るは必ず君臣の解體より始まるが故に天下の悲慘を除くには、皇統を一系にして君民を一體にするより善きはないと思召され、天津日嗣第二の御璽として八咫勾璁(玉)を頸に纏くは衆を統御する象徵)を授け、四海一家の大御心を不言の中に傳へ給ふた。是れ我皇室の萬世一系、四海一家の國體に由て起る所以であつて、太陽の萬物を煦育する溫德と同一體なる大御心の御仁德と稱し奉るのである。大御神は無限の愛と絕對の和なる御智德と御仁德との御執行を妨げる者の出る時は、忽ち對治して少しも假借し給はず、直に之を正道に歸らせ給ふた。例へば素盞嗚命の大御神の許に昇り給ふ時、善からぬ心の有るを聞召し、玉體を武具に固めさせられ、みゝづから迎へ給ひ、一語の下に命の慢心を挫き、忽ち化して賢宰臣となし給へるが如きであつ

て、之れ實に大御神の御勇德である。故に天津日嗣第三の御璽として天叢雲劍を授け、皇孫の智仁を障碍する者の有る時、此劍を以て一刀兩斷の處置を執るべきことを不言の中に敎へ給ふたのであつて、之を太陽の烈德と同一體なる大御神の御勇德と申し奉るのである。即ち大御神の此三德が大和魂の本源であつて、我國民道德は大和魂から流れ出て居るのである。

そこで大御神が皇孫に三德を傳へ給ふに、三種の神器を以てし、何故に御詞を以て敎へ給はなかつたかと云ふに、我國は古來『神ながら言擧せぬ國』であつたからである。神ながら言擧げせぬとは、天意に任せて理窟を言はぬといふことで、神御自身も其神德を御口にするよりは、直に御行の上に表はし給ふた。

卽ち不言實行といふ大なる敎が其中に含まれて居るのである。故に後世我國民の大和魂を發現するのも皆不言行である。宗吾が愛を說かず救を說かず、直に愛と救とを行ひ、最後の一言に神明の知ろし召すありと言つたなどは其好適例で、そこに神意と人意との一致を見る。即ち我日本人は神を知ると知らざるとに論なく、至誠を以て人間力を盡す時に、神人交感を見るのであつて、耶蘇が濫りに愛を說き救を說くに急にして行之に及ばず、神人交感を叫ぶも奇蹟の外見るべきものなかりしが如きと、日を同ふして語るべきものでないのである。

又前に述べた五代の地神は、我皇國人種の祖先であつて、皇國の人種は悉く其神孫神裔である。故に國を神國と稱し、人を

神孫と稱へて、開闢以來幾千萬年の今日まで、未だ曾て一たびも此腰を外國人の爲めに折らず、此膝を外國の爲めに屈せずして益〳〵其榮を見つゝあるのである。世界史を繙くもの、斯くの如き例を何れの國に發見し能ふか。宇内國を建つるもの多しと雖も、或は亡び、或は興き、國土今存するものも幾度か其主を代へ我國に儔ぶべきもの一として見ることは出來ぬ。之眞に我邦が萬邦に秀づる神國たり、神の幸する國たる事を現實に示すものに非ずして何ぞ(或學者は之等地神は我國土經營の後、更に海を渡つて世界の人種の祖先となつたと說いて居るが、太古の事邈として知る能はざるを遺憾とする)

次に基督敎の所謂神とは猶太人の傳說に基き、舊約全書に記されたエホバである。此神は最初に光あれと云つて光を造り、暗と區別し、漸次萬物を創造して六日にそれを終り、七日目を安息日と定めた。そして最初に造られた人間はアダムと云ふ男で、其アダムの肋骨を取つて女を造りエバと名付けてアダムに配した。後此子孫が地の面に繁衍するに至り、エホバは其人間等の心の惡いのを見て地の上に人を造つた事を悔ひ且之を憂へた(彼等が萬能なりと言ふ所の神は、人の性を善ならしむる能はず)此時ノアといふ正しい人間があつたから、エホバはノアに命じて大なる方舟を造らせ、且大洪水を以て世界の生物を滅すから、ノアは其妻子と地上の生物の牝牡二つ宛を其中に入れて洪水の難を避けろと命じた。ノアは其命を奉じて大なる方舟を

造つて其期を待つて居るとノアが六百歳の二月天の戸が開けて大雨が降り初まつたので、ノアは其妻子と共に舟に入りすべての獸、鳥、蟲等地上の生命の氣息ある肉なる者は、牝牡二つ宛來て舟に入つた。雨は四十日四十夜降つて水は地に瀰漫し、すべての高山も皆水を以て被はれるに至つたから、ノアの舟に入つた以外の人類及び諸動物は悉く死滅した(天照大御神は人の惡しき心を善に歸らしめる御神德が在したが、基督敎の神は自己の造つた人類の惡心を飜させることが出來ずに自己の愛するもの以外の人類動物を悉く殺した。其殘虐性は到底神といふべきでない)かくてノアが六百一歳の二月地が乾いからノアや其家族及諸動物は舟から出た。神は之を祝して『生よ、增殖よ、地に滿てよ』と云つた。(此祝福を受けたノアの子孫たる猶太人の國は亡び、此神を奉ずる基督敎を歐羅巴に傳播せしめるに最も力あつた所の羅馬大帝國も亡び去つたのは憐れな事である。又惡心あるものゝ凡てを亡ぼした後のノアの子孫に尙罪惡のあるは氣の毒である)其後ノアの子孫は大に繁殖し、路加傳によれば其後十一代目にアブラハムが出た。それからは前に記した系圖の如くにヨセフに至り、其妻となる約のあつたマリアが聖靈によつて耶蘇を生んだといふことである。以上は猶太人の傳說であるが、國初以來神ながらの國として、同一始祖の下に連綿として繁榮せる我帝國々民が、祖先以來の語り傳へを捨てて亡び去つたる猶太國の傳說を眞として信じなくて

はならぬ理由が何所にあるだらうか。吾人は此肉體に血の流れて居る限り、大和魂の存在する限りは、天孫民族の後裔たることを光榮としなければならぬ。

終に一言しなくてはならぬのは、邦文新約全書に記されたる『神』なる文字である。此字は我國の神なる義を表はす爲めに既に千年來使はれて、我國民の頭に深く浸み込んで居る文字である。然るに基督敎徒はゴッド(著者はヘブライ語を知らぬから唯英語を擧げたのである)なる語を譯すのに、吾人が祖先以來最も尊崇する神なる語を充てゝ仕舞つた。そして神は唯一である基督敎の神の他に神はないと說くが故に、無智の輩は自己の祖先たる神を神に非ずとし、不敬の言行を敢てして憚らぬものさへ少なくない。之は實に大和魂を銷磨せしむることと大なるもので、恰も軒を借りて其家を奪はんとすると同じく、不都合極まる事である。這は單に著者の言に止まらず、基督敎徒以外の日本人は、必ずや神なる語はゴッドに充てる爲めの語でないと言ふであらう。基督敎徒若し一片の大和魂あらばゴッドの譯語を神以外の語に求めて、速に之を改むべきである。

二、我國體と基督敎

沙上の樓閣は忽ち崩る……萬邦無比の我國體……
血族團結は最も自然也……筑紫日向宮……不世出
の英主……日本民族……祖先崇拜の美風……基督
敎は我國體と相容れず……雛祭とクリスマス

沙上に築いた樓閣は、如何に輪奐の美を極むるとも、忽にして崩れ去つて影だも止めざるに至るは言を俟たない。國體の成立亦然り。鞏固ならざる基礎の上に建設せられた國は、沙上の樓閣の例に洩れないのである。有史以來滅び去つた國は其數甚だ多く、現存せる國とても我國を除くの外は、幾度か其君主を代へ、其都度國民は兵亂の災禍を被つて悲慘に泣いたのである。隣邦支那の如き好適例で、其國在つて以來、或は南人が主となり、或は北人が主となり、或は蒙古人が主となり、或は滿洲人が主となり、君主を代へること幾度なるを知らず、近くは數年前革命の爲めに清朝が倒れ、其後成立した共和政府の大總統は數年ならざるに、自ら帝王とならんとして國民の激昂を買ひ、又も兵亂が起つて、現に南部支那は戰鬪の巷となり、國民は生命財産の保護さへ危ふく、其堵に安んずる能はずして、慘禍に泣くの狀態に陷つて居るのである。斯くの如く諸外國が常に動亂の止まないのは畢竟君臣の分定まらず、國體の基礎の薄弱なのによると言はねばならぬのである。

宇内萬邦皆斯くの如き間、我國獨り萬世一系にして、寶祚の隆なる天壤と窮りなき皇室を奉戴して居るのは國民たるものゝ最も光榮とし、最も幸福としなくてはならぬ所である。元來人は絶對に獨立孤存し得べきものでない、必ず共同團結しなければ其生存を全ふするを得ないものであるから、如何なる未開野蠻の人種でも、部落をなし共同團結して生存して居るのである。

文明社會に於ける此團結の形體は一樣でないが、大體は君主國體と民主國體との二つとなる。そして君主國體も其源由は一樣でないが、昨日まで同等の國民であつたものが忽ち國王となつたといふ樣な俄分限の君主では難有味もなく國民も信服しない。其よりは國民の選擧した大統領がよい。けれ共數年交替の大統領などには尙さら難有味がない。國家を爲す以上は其國家と終始する元首が一番難有く、斯くてこそ元首の眞價値があり、其團體は鞏固なのである。又國民の方から見ると、歐洲諸國などには征服者と被征服者と混同したり、或は遊牧人種が土着したる雜然たる人種の團體たるものがあるが、利害を以て集散し、約束を以て維持してるものは、其團體が堅固でない、又久

しく保たない。何故かと云ふに、利害の異同は生活の狀況に從つて時に變調し、人爲の約束はまた人爲によつて破棄することが出來るからである。で最も鞏固なる團體を組織するにはどうしても血族相依るの外はない。又血族相依るの團體は極めて自然的である。兒孫が父母の保護の下に團欒するのは社會を成すの初めであつて、民族が同始祖の威靈の下に國を成すのは、天賦の團結である。即ち其民族間に通じて居る血脈が自然の連鎖であつて、人爲を以て之を絶つことは出來ない、利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情を以て離るべからざる共同生存をするのである。詳言すれば、血統は之を祖先に受けて子孫に傳へるのであるから、其團結は永久である。又血族關係は利害を

以て離散斷絶すべきものでないから其團結は頗る鞏固である。そして之を統一するものは祖先の威力であるが、祖先の威力は對等の約束でないから、敬愛の情が厚く、忠順の念が深い。一家に於て家長は祖先の威靈を代表し家族に對して家長權を行ひ、國に在つては元首は其民族の始祖の威靈を代表して統治權を行ふ。此家長權と統治權とは、君父が其祖先の慈愛する子孫を、祖先に代つて保護する權力であつて、斯くの如き團結によつて成れる團體こそ眞に永遠に鞏固なる、理相的團體である。而して此理想的團體は、世界萬國に求めて、唯我大日本帝國一つあるのみである。

天照大御神が三種の神器を、皇孫瓊々杵尊に授け、豐葦原の瑞

穂國に臨み、萬世一王、四海一家、君民一體、忠孝一致の國體を建つべきを命じ給ふた事は前節に述べた如くである。茲に於て瓊々杵尊は終に天岩座を排して、日向高千穂の槵觸峰に降り、吾田の笠狹の御碕に都を奠め給ふ。之が筑紫日向の宮の始めである。彦火々出見尊之に次ぎ彦波瀲武鵜草葺不合尊其後を次ぎ、三世の間筑紫宮に在したが磐余彦尊に至り大和に都を定め給ふた。之を神武天皇と申し奉る。我國の紀元は實に神武天皇に始まるのである。或學者は『或上記によれば、彦波瀲武鵜草葺不合尊に二世彦天皇、三世彦天皇とが都合七十一世ましまし、正統繼承して神武天皇に至れりとある。之等の舊記悉く信ずることは出來ぬが、唐書に我皇統の事を記して彦瀲五十二

世、皆尊を以て號とし、筑紫城に居る、彦の子神武立ち徙りて大和洲に居る。とあるを見れば、我が當時の舊記を傳ふるもので、今の正史の傳ふる所は脱漏のある所明かである』と言つて居るが、之等はきだしも、基督教の如きは我神代の事跡を信せず、甚だしいのは、神武天皇紀元を以て、西暦紀元と同じ頃だらうとなど、我國史を無視する不都合な輩もある。猶太人の傳説は信ずるが我祖先以來の記録は信じられないと云ふが如き輩は、之を何と評してよいかを知るに苦しむのである。我國神代のことも甚だ漠然たるやうではあるが、自ら皇統の淵源と、帝業の基礎とを知る事が出來るのみならず現に其儘に繼續して來て居るのであつて、國亡びて居るに所なき人種の貧弱なる傳説とは

其根本の性質を異にするのである。彼の徒らに疑惑し、或は牽強附會し、或は小事に拘泥して、國史の大體を謬るが如きは、大和魂を有するものゝ所爲でない。著者は飽くまで正史の傳ふる所を信じて疑はないものである。

神武天皇は鵜草葺不合尊の御子にまし〳〵特に大志あり聰明勇武に渡らせ給ひ、不世出の英主に在した。前三世日向に都し給へるが故に、九州地方の土民は皆心服するに至つたが、東方の土豪は尚ほ王澤に沾はぬものが多かつたので、茲に親征の途に就き給ひ、普く不逞の徒を平げ、都を大和橿原に奠め給ふ。茲に於て帝基益〻牢く、君威益〻遍く、皇祖天照大御神の御神勅は日月の如く輝いて、神統連綿として繼承せさせ給ひ、神武天皇よ

り今上天皇に至るまで實に百二十二代、年は二千六百年に垂んとするの久しきに亘り、歴代の天皇未だ御一方も、國家の安危を以て皇家の安危とし給はざるはなく、國民の苦樂を以て玉體の苦樂とし給はざるはない。既往を以て將來を推せば、さゝれ石の巖となりて苦のむすまで、千萬世の後と雖も、當に斯くの如くであるに違ひない。實祚の隆なる天壤と窮なかるべしと宣へる大御神の神勅、照々として萬世に輝き、尊しとも尊い極みである。

此萬世一系の皇統を戴く我日本人民は如何なる人種であるかと云ふに、外國に於けるが如き雜然たる人種の集合體ではなく、皆一統の神孫である。大和民族の系圖は神別、皇別、蕃別の三つに大別される。神別と皇別とは唯宗室から別れた時代の前後によつて區別されたのみで、共に同じく皇祖の苗裔たる一統人種たるは言ふまでもなく、此神別と皇別とが我大和民族であるが、其中へ蕃別が雜つた。蕃別は支那三韓等から歸化したものであるが、其數は甚だ少く、皆神別皇別の抱化を被つて、何の影響する所もなかつたのである。又上代には彼の土蜘蛛の如き、蝦夷の如き、樣々な民族が國内に散在したが、大和民族の勢力の及ぶ所、自然淘汰の結果遂に其跡を絶ち、全國悉く同胞連族の人民を以て滿たされるに至つたのである。故に我國は外に對しては堂々たる獨立の帝國であるが、内に顧みれば家族の團欒と異る所がないのである。斯くの如きは世界中絶えてなく

して獨り我國にある所、國民たるもの以て無上の光榮とすべきである。併しながら時に汚隆あり、世に治亂なきを保し難く、妖雲九重の天を蔽ひ、日月暫く光を失ひ、後世史を繙くものをして燈下覺えず熱涙を滂沱たらしむることあるも、斯くの如きの時大和魂は必ず强烈に發現して其汚濁を清めなければ止まない。多少の盛衰汚隆ありとも、曷んぞ皇室の尊嚴を疵、けることが出來やう。上古王澤の未だ普からざりし頃には往々王師に抗するものもあつたが、忽ちにして其跡を絶ち、妖僧道鏡の如きもの神器を覬覦することあれば、大和魂は烈々として和氣清麿の口邊より迸り出で、能く寶祚を九鼎大呂より重からしめて賊膽を破つた。世の益々降るに從つて絶えて神器を覬覦するものなく、逆賊尊氏の如きさへ決して自ら立たんとはせず、皇胤を擁して北朝を始めた。純樸なるべき上代の民に神器を覬覦するものあり、輕薄なるべき後世の民に却つて之を見ないのは、德澤世と共に積むを知るべきである。

上來述るが如く大和民族が今日の光榮ある所以のものは、實に天照大御神が、安國と平らけく安らけく知ろしめ召せと宣ひ、血統團體を建設せしめ給ひし大御心の餘惠である。之を他面から見て、何が故に血統の近いものが相依つて家を成し、民族を成し、又國を成したかといふに、祖先を崇拜して、其威力と慈愛との下に生存の保護を全ふせんとする、天性の至情に他ならぬのである。人の子が父母を敬愛して、慈愛に基く保護の權力に從

順なる至情は、其父母の父母に及ぼし、更に延いて祖先に及ぶのである。大和民族の祖先の祖先たる根源は、畏くも我天祖であらせられる。天祖は實に大和民族の始祖にまし〳〵、皇室は民族の宗家である。父母を拜するは當然であつて、父母を拜する以上一家の祖先を拜しなければならぬ。既に一家の祖先を拜す、いかで一國の始祖を拜せずして濟まうか。家長の位は祖先の靈位であつて、父母は現在にある祖先である。皇位は天祖の靈位であつて、天皇は現世にある天祖であらせられる。即ち父母に孝なるべき所以は、直に皇室に忠なるべき所以であつて、大和魂から發する所の祖先崇拜は、萬邦無比の善美なる國體に益〻光輝を加へるのである。

述上の如き我國體の成立關係を知らば、基督教の說く所と氷炭相容れざるものがあるは明かであつて、到底大和民族の信仰すべき宗教でないことは、また多言を要しない所であるが、茲に其主要なる點一二に就て述べることゝしやう。基督教はゴッドなる語を譯すに神なる語を用ひ神は唯一にして基督教の神の外に神なしと說くが故に、我祖先崇拜に基く敬神の美風を破壞し、大和魂を銷磨せしめ、國體の基礎を危ふくする。基督教は神は唯一にして國と權と榮とを窮なく有ち、人は凡て平等であつて、神から權力を授けられなければ特殊の權力はないと說く、爲めに基督教國の帝王は戴冠式を行つて、基督教の僧侶から王冠を受け以て神から王たるの權力を授けられた證とする。

然るに我皇室は天祖以來連綿として無窮に傳へられたる神孫にましまし、毫も基督教の力を俟たない。故に基督教の教義を究極すれば、我皇室を認めないといふ不都合極まる結論に到達する。此二點を見ば他は多く論ずるまでもなく、大和民族の信仰すべからざる宗教なることは明かであらう。況して其唯一の信條たる愛に於てさへ、ノアの洪水あり、耶蘇の無花果あり、矛盾せる殘虐性を遺憾なく暴露し居るに於て、大和民族たるものは、大和魂のあらん限り、碧眼紅毛の人と化せざる限り、斷じて基督教を信ずべからざることを痛切に感ずるのである。

雛祭りとクリスマス――之は『我國體と督督教』と言ふことには關係はないが、どうも基督教徒は我舊來の美風を片つ端から破壞する風があるのを遺憾に思ふから、序に記したので、敢て雛祭に限つた事はない。丁度三月の節句の時であつたが、著者は或基督教徒の家を訪問した。其家には數人の娘があるので定めて雛壇も美しく飾られてあるだらうと思つて見ると、何所にもそんな風はない。娘等は何となく淋し氣な顏をして遊んで居る。不思議に思つて主人に向ひ、君の所では雛祭はしないのかと尋ねると、主人は、雛祭り……そんな馬鹿な事をと、喋々と述べ立てた。其人は基督教信者だつたのである。著者は考へるのに、雛祭りなどは家庭の行事として最も善い事で、無意義だなぞと言つて捨てるべきでない、何時までも保存したい風だと思ふ。雛を飾つて祭る事が、既に優

美で、兒女に與へる感化は少なくない。殊に少女が主となつて父母兄弟を客とし、心の限りを盡して斡旋する時に、假令如何に不和合な家庭でも、忽ち春風は堂に滿ちて、言ひしれぬ團欒の妙味を味ふことが出來るであらう。又小さな雛を愛するといふ事は、やがては他者に對する愛となり、更に美しい雛を見ることが、美術趣味を養ふ基礎となる等、雛祭りから得る所の利益は決して少なくない。男の子の祝たる端午の節句も美風である。武者人形と武具とは尚武の風を養ふべく、家の定紋を染めたる飾幟は祖先崇拜の念を起さしむべく、戸外に立てた鯉幟や吹流しは如何にも勇ましい爽快な感を起させる。又東京では行はれないが、地方では菖蒲で屋根を葺く

といふことの印に、菖蒲を軒に挿す。數本の菖蒲何でもない事のやうではあるが、之が軒に挿してあるのを見る時に、一種言ふべからざる清々しい感が起る。古來の年中行事には、之等の美風が少なくない。然るに基督教信者は一切之を捨て年中行事として見るべきはクリスマスのみである。クリスマスが子供を喜ばせる事は日本の節句に讓らない。併し其喜ぶことが必ず美風とは言はれない。子供等の喜ぶのはクリスマスツリーから得る所の物を喜ぶのだ、クリスマスの贈物を喜ぶのだ。そんな乞食根性は養ひたくない。家庭の團欒もあらうが、雛祭りの優美を欠き、端午の活潑と清々しさを欠いて、喜び噪ぐのは寧ろ殺風景だ。國民性に適する年中行

事を捨てゝ却つて其劣れるものに就く人の心事を憐まずには居られない。

結論

耶蘇と宗吾との優劣……遠視的近視眼……共鳴と風馬牛……個人主義……眞の自覺と眞の自我

上來述べた所によつて耶蘇と宗吾との人格には大なる相異があつて、基督教徒の所謂『吾人〳〵類の道念と品性の先達模範として尊重敬服すべき者古來唯一耶蘇基督あるのみ』とさへ讃美する所の大人格者も、我佐倉の名もなき一農民にだも及ばさる事の遠いのを明にし得た事と信ずる。而して『世界人類の全體に向つて眞正の福祉を與ふるもの獨り我基督教あるのみ』と誇稱する宗教も、我帝國の光榮と大和民族の幸福とには絶對に沒交渉、否、之を信ずることに於て、却つて國體の基礎を危ふからしむるものなる理由をも明かにし得た事と信ずる。

耶蘇崇拜すべからず、基督教信奉すべからず。而かも尙ほ歸依者の年と共に加はりつゝあるを見るに於て、吾人は轉た遠視的近視眼蔓延の勢の猛烈なるに痛歎を禁じ得ないのである。

邦家を滅すもの敵國に非ず、邦家の前途を誤るもの惡政治家に非ず。唯遠視的近視眼なる一病弊あるのみ。彼等の眼中には我國の美風は一も映じない、彼等の頭腦には我國の長所は意識し得られない、彼等の鼓膜には我國の妙音は響かない。斯て

彼等は偏に歐米の文物思想に憧憬し、舊弊因襲打破なる一語の下に我美風長所をも一擲して顧みやうとはせず、彼の惡風短所を學んでさへも得々として新智を誇り、毫も其非を覺らないのである。歐米の文物に學ぶべきものゝ多いのは素より言を俟たぬが、其惡風短所をまで學ばざる可からざる理由何れにあるか。歐米には歐米特有の思想風俗あり、我國には我國特有の思想がある。例へば彼の腐敗墮落を慨して思想革命の聲を擧げるの時、彼に於ては痛切に其共鳴を感ずるものも多からうが、我に於ては風馬牛、毫も必要を感ずる所でない。之れ其思想の出發する根底に於て兩者の間に大なる相異があるからである。然るを此相異の如何をも顧慮せず、歐米に於ける珍奇の說といへば直に之を歡迎し、甚だしきは發狂者の說をさへ金科玉條として崇拜して居る者もある。斯くして堅實なる思想よりは、我に對しては寧ろ病的乃至危險なりと思意せられる思想の方が盛んに輸入せられ紹介せられて、着々我固有の美點を破壞しつゝあるのである。恐るべきは遠視的近眼者、憐むべきは遠視的近視者である。

近來自覺、自我の聲の盛んになつたのは喜ぶべき現象で、遠視的近視眼一掃を期し得べきかとも思はれるが、之にもまた歐米の個人主義者の說に出發した所の、極端なる自己本位のものあるは最も遺憾とする所である。人類が絕對に孤立し得べきものでないことは、前にも述べた如くであつて、共同團活によらな

ければ生の幸福は得られない。即ち自己の幸福を増すと同時に共同團體の幸福を増進すべく、平常と雖も多少の犧牲的精神を以て努力することによつて、大に自己の幸福を増すのであつて、若し之に反して絶對に自己の幸福のみを希望し、共同團結の目的に背馳するも顧みざるが如きもの多きに至らば、其共同團體は忽ち破壞し、遂に自己一個の幸福をも保つこと能はざるに至るは必然である。彼の極端なる個人主義者の如きは、共同生存によつて得つゝある幸福を覺らざること恰も犬の如く猫の如くなるが故に、度すべからざる妄説を吐き、共同生存を無視するのであるから宜しく之を絶海の無人島に送つて孤立獨存せしめ、以て彼等の主義主張を貫徹せしめたならば、俊寛僧都が都

戀しさに、狂ひ死をした故事の如き光景の裡に、彼等の理想を遺憾なく實現し得るであらう。眞の自我は斯くの如き利己本位のものでない、大和民族の一員たるを自覺して大和魂を振作することである。即ち自己の中には、親も子も兄弟も、朋友も、君も、主も、國家も皆包含せられて居るのを覺ること眞の自覺で、此内容を充實せしむる意志が、眞の自我の意志である。彼の個人主義者の如きは、高尚なる人類共存の有機體組織の意義と、之を連結する道義とを解し得ざる動物性を有するもので、如何に巧妙なる語辭を以て之を説くとも、國家を毒し、人心を害するの非を掩ふことは出來ない。而して之に出發して自覺を叫ぶ者の如きは、自ら迷つて動物性に近きつゝあるの愚を覺らざるもので

結論

ある。紛々たる妄說曷ぞ數ふるを須ひん。我大日本帝國の光榮と我大和民族の幸福とを增すべきもの、其固有の美質なる大和魂の振作を措いて、斷じて他にあるを見ない。吾人の言はんとするもの、豈啻に耶蘇と宗吾との比較に止まらんやである。

耶蘇と宗吾 終

大正五年五月一日印刷
大正五年五月九日發行

定價金壹圓

著作者　原坦嶺
發行者　東京府北豐島郡元金杉百九十四番地　桑原謙藏
印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　上村龍之助

耶蘇と宗吾

不許複製

發行所　東京市下谷區入谷町三十五番地　振替貯金口座東京二六五三五番　欅齋社　電話下谷一〇九七番

印刷所　東京神田區三崎町三丁目一番地　博信堂

328
410

10.9.211

終